

韓国国立図書館 司書部日誌 1948

韓国図書館史研究会

「司書部日誌」翻訳刊行委員会 編

田中亮 訳

まえがき

韓国の近現代図書館は、日本統治期、アメリカ軍政期、政府樹立期、朝鮮戦争期という複雑な統治、政治状況に翻弄された歴史を経て今日に至っている。その混乱により資料が散逸したこともあり、図書館史研究はあまり進んでいなかった。それが2020年に、朝鮮総督府図書館時代の1931年から1961年までの国立図書館時代に至る、30年間に及ぶ公文書87件が一綴りになって、ネットオークションに出現した。天祐というほかはない。

幸いにも公文書綴は韓国図書館史研究会の手に渡り、同会は直ちに検証し、発見の意味や解放前後の国立図書館の状況ほかの解説を付して2021年に緊急出版した。中核をなすのは「司書部日誌」である。目録（和韓書、洋書）、古典籍、サービス、収書の各部署における1948年一年間の業務実態が克明に記され、解放後、模索しながら自力で図書館を構築し、国民のためのサービスに邁進、努力する職員の姿が浮かび上がってくる。大変に貴重な記録である。なお、同綴は現在、1963年に名称を改めた国立中央図書館に収蔵されている。

日本近現代図書館史研究においても、同時代の韓国の図書館を切り離して考えることはできない。しかし、これまで韓国に有力な資料や文献が多くなかったことから、関係性を論ずることは困難であった。本書はその空白を埋めるものとして期待される。しかも業務日誌という生資料により、現場職員の業務実態を前面に出して編集された図書館史は例をみない。この方法論も、図書館史編さん、図書館文化史研究に一石を投じるものである。

翻訳出版に当たっては、専門家による論考を加えた。日本統治期の図書館の性格と活動を考察した、新藤透「前史」としての朝鮮総督府図書館」と、朝鮮総督府図書館時代から勤務し解放後に館長職に就いた韓国近現代図書館史のキーマン李在郁に光を当てた、千錫烈「韓国図書館界における李在郁の活動と生涯—朝鮮総督府図書館と国立図書館における実践を中心に」である。これにより、原書に一層の付加価値を与え、資料と研究書の両面を兼ね備えるものになった。

公共・大学図書館員と図書館情報学研究者はもとより、韓国近現代史研究者、司書資格取得を目指す学生諸君にも是非目を向けて欲しいと願っている。

翻訳者の田中亮氏は、宮城県教育委員会に所属する現役の図書館司書である。かねて韓国の書物や図書館に関心を寄せていたことから、いち早く原書に着目し、並々な

らぬ思いで翻訳を進めてきた。同氏の熱意なくしてこの出版はなかった。その労に感謝を捧げたい。

翻訳出版を快く承諾くださった韓国国立中央図書館、韓国図書館史研究会および原書執筆者各位、原著出版社図研文庫、同社との仲介の労をおとりいただいた出版社クオン（東京都千代田区）の金承福氏に心より御礼申し上げる次第である。

本書の出版により、日韓両国の図書館に理解と交流が深まることを願って已まない。

2026年5月

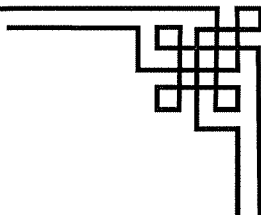
「司書部日誌」翻訳刊行委員会 飯澤 文夫

目次

まえがき（飯澤文夫）	(iii)
凡例	(vi)
第一部 概論	
解説	
『韓国国立中央図書館 司書部日誌:1948年(檀紀4281年)』(田中亮)	2
論考	
「前史」としての朝鮮総督府図書館(新藤透)	9
韓国図書館界における李在郁の活動と生涯 —朝鮮総督府図書館と国立図書館における実践を中心に—(千錫烈)	20
原書解説より	
韓国図書館史研究を行う理由と方法(ソン・スンソプ)	40
解放前後の国立中央図書館の状況(チョ・ヘリン)	52
『司書部日誌』の発見、その意味と内容を調べてみる(クオン・サンス)	61
第二部 司書部日誌	
司書部日誌(1948年)	65
資料	
①司書部職員一覧(1948年)	445
②朝鮮総督府図書館(1922年～1945年)および 韓国国立図書館(1945年～1953年)略年表(田中亮)	446
訳者あとがき	451
執筆者紹介	455

凡 例

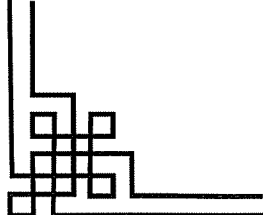
- ・本書は、한국도서관사연구회 기획 『국립중앙도서관 사서부일지 : 1948년 (단기4281년)』 (한국도서관사료총서 ; 1) 도연문고, 2021의翻訳と、関連する論考で構成されている。
- ・訳者および論考執筆者による補足は、[]で括り文章中に挿入した。
- ・訳者注および論考執筆者注は、()で括り各文末にまとめた。
- ・原書で掲載されている、韓国における日本の植民地時代の期間を指す「일제강점기」(=日帝強占期)は「日本統治期」、「한반도」(=韓半島)は「朝鮮半島」、「북한」(=北韓)は「北朝鮮」、「6.25전쟁」(=6.25戦争)は「朝鮮戦争」と表記した。
- ・漢字は原則として常用漢字にしたがったが、人名および一部資料名で旧字を使用した。人名は調べのついた範囲で漢字表記をし、調べがつかなかったものは、近似した発音でカタカナ表記をした。



韓國國立圖書館司書部日誌 1948

第一部

概論



『韓国国立中央図書館 司書部日誌:1948年(檀紀4281年)』

한국도서관사연구회 기획; 국립중앙도서관 자료제공
『국립중앙도서관 사서부일지: 1948년(단기 4281년)』
(한국도서관사료총서; 1), 서울: 도연문고, 2021年, 411p.; 29cm
ISBN 979-11-972782-4-2

田中 亮

1. はじめに

本書は、2021年に韓国図書館史研究会（以下「研究会」と略。）の企画で翻刻され、「韓国図書館史料叢書」の第1号としてソウルの図研文庫から刊行された、韓国国立中央図書館（1948年当時は「韓国国立図書館」。以下「国立図書館」と略。）司書部による1948年の業務日誌である。本来公的機関の業務日誌が世に問われるケースは、情報開示請求による公開が無い限りほぼ不可能である。しかし研究会による後段で紹介する国立図書館への説得と、その説得を理解した国立図書館の全面的協力と提供により、本書は刊行された。

近代朝鮮の図書館史は、朝鮮総督府図書館、朝鮮鉄道図書館、京城府立図書館、京城帝国大学附属図書館などの比較的規模の大きな図書館について、資料も比較的日本国内に残っていることから、植民地文化史の一端としての論稿が多い。しかし日本の植民地から解放された韓国の図書館（北朝鮮も然り）となると、特に解放直後の事情は日本において資料と情報が乏しいこともあり、どのような業務が行われ、どのようなサービスを提供していたか窺い知ることは難しい状況であったが、国立図書館が1973年に『国立中央図書館史』を、2006年に『国立中央図書館60年史』を、2016年に同『70年史』を刊行し、日本国内でも所蔵している図書館があることから、容易に当時の状況を垣間見ることが可能となった。

しかし、それら「正史」をまとめるにあたり、日々の業務を簡潔に記録した一次資料を目にすることは関係者以外に皆無に近い。本書は1948年という正に大韓民国が独立した年の国立図書館の業務日誌であり、当時の具体的な図書館業務がどのようなものであり、利用者に対しどのようなサービスを提供したか、あるいはしようとしたかを理解することのできる、非常に価値の高い第一級史料といえる。

韓国の図書館については、近年デジタル化の急速な普及に伴うサービスの状況に関心などもあり、業務等について日本でも多くの論稿を散見するものの、図書館史については関心が無いためか論稿を見ることはない。韓国国内では、自国の図書館史とあって資料も多く刊行されており、本書もその1冊であるが、日本国内の図書館で所蔵しているのは、国立国会図書館ほか数館である。韓国の図書館史、特に解放直後の具体的な図書館業務が記載された本書は、当時の様子を知る上でも貴重な史料であるとともに、新生国家の図書館

がどのように構築され、どのように現在に至っていったかを知ることができる資料ともいえる。本書の紹介を通じて、今後日本において韓国図書館史に関心が持たれることを期待するものである。

なお、副書名にある「檀紀」とは、朝鮮神話の最初の王とされる檀君王儉（단군왕검）の即位を紀元とする紀年法で、韓国では1948年から1961年まで年号として採用されていた。

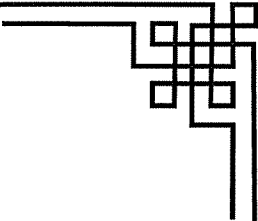
2. 構成および内容

本書は、1「図書館史研究を行う理由と方法」、2「解放前後の国立中央図書館の状況」、3「司書部日誌発掘、その意味と内容を概説する」、4「司書部日誌」の4部構成である。

1は、韓国図書館史研究会長による、韓国図書館史のこれまでの研究成果と研究会発足の経緯、そして今回本書刊行となる廃棄された国立図書館公文書綴の発見と調査が記述されている。これまでの韓国国内での図書館史研究は、1969年に白麟（ペク・リン）による古朝鮮から大韓帝国末期までを内容とする『韓国図書館史研究』刊行以後どうであったかと問い始め、近現代に関する図書館史は未完成のまま結論付けている。また近年では図書館に携わった人物に注目し、その人物の業績を通じて韓国近現代図書館史を試みようとして、韓国図書館協会事務局長で韓国公共図書館運動に尽力した嚴大燮（オム・デソナ）を例に挙げている。そして近年のデジタル技術の進歩と相まって、古い新聞記事や雑誌論文をデジタル化して図書館等が積極的に公開していることから、一次資料が簡便に調査可能になっている点を挙げている。このような中で、韓国の近現代の図書館史を研究するための組織として、研究会が2020年2月に発足した。そして同年春に研究会員が、本書の元となった1931年から1967年までの国立図書館公文書等87件の公文書綴1冊を、インターネットのオークションサイトで発見した。その経緯、研究会員による入手、研究会内での史料価値の検討、国立図書館への寄贈の打診および研究のためのスキニング撮影の許可、一切の公文書綴の国立図書館の受贈の経緯、出版の経緯が記述されている。規程により廃棄されたであろう公文書が、オークションサイトで発見されたことは驚きに値する事実であるが、この発見がなければ本書は誕生しなかったこともまた事実である。

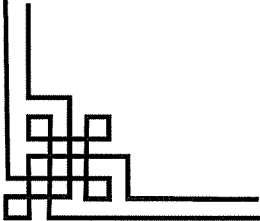
2は、1945年の解放前後における国立図書館の状況について記述されている。国立図書館は、その前身が1925年4月に開館した朝鮮総督府図書館である。オークションサイトで発見された国立図書館公文書綴は、その年代からもわかる通り、植民地時代から日本からの解放を経て新生国家の国立図書館として運営、朝鮮戦争を経てようやく混乱から少しずつ政治的安定に至る期間の図書館業務に関するものである。

植民地時代は、朝鮮半島の公立の中央図書館として自らの業務を行いつつ、地方の公立、私立の図書館への指導もおこなっていたことが文書の中から散見できる。また日中戦争、太平洋戦争の時期になると、日本の戦況に左右されながら図書館業務をおこなっていったことが業務日誌から明らかになった。例を挙げると1941年末の職員数（日本人、韓国人職員の合計）は91名であったが、1942年末85名、1943年末81名、1944年10月末には63名



韓国国立図書館司書部日誌 1948

第二部
司書部日誌



1948年 1月 1日 木曜		暦年 第 1日	天 候	第 276日	晴			
指令 【朱書】	1. 新年式							
	休館する							
	受命者		完成	年 月 日				
東書課	・午前10時半頃、中央閲覧室にて祝賀式を行い、後に館友会主催の第二回大会を開催し、午後2時半頃和気藹々な中で終わった。							
	・図体選 ⁽¹⁾ では司書部が第二位を勝ち取った。							
	[記載なし]							
西書課	[記載なし]							
	[記載なし]							
	[記載なし]							
古典課	[記載なし]							
	[記載なし]							
	[記載なし]							
編纂課	[記載なし]							
	[記載なし]							
	[記載なし]							
收書課	[記載なし]							
	[記載なし]							
	[記載なし]							
勤務事故者	欠勤							
	其他							
完成	図書	東書 冊	西書 冊	古典 冊	東登 冊	西登 冊	古登 冊	
	カード	東書 枚	西書 枚	古典 枚	編纂 枚	印目 枚	雑目 枚	

◆司書部閲覧者

◆書庫巡察

1948年 1月 2日 金曜		暦年 第 2日	天 候	第 277日	晴			
指令 【朱書】	1. 事務開始							
	受命者		完成	年 月 日				
東書課	・新規登録本の目録作成。							
	・新旧小説双書 ⁽²⁾ の目録作成。							
	・雑誌の製本を依頼する。							
西書課	・新書を分類中。							
	・研究室備え付けの図書を整理す。							
古典課	・『東里集』 ⁽³⁾ の細目目録を継続筆写中である。							
	・新書カードを作成中である。							
編纂課	・奎章閣の目録 ⁽⁴⁾ を謄写継続中。							
	・『文苑』 ⁽⁵⁾ 21号の再校の校正。							
	・金甲童副司書、午前中に現業勤務を手伝う。							
收書課	・洋書、第一次整理と登録をする。							
	・定期刊行物を整理する。							
勤務事故者	欠勤	趙泰孝[副司書]、朴娟根						
	其他							
完成	図書	東書 冊	西書 冊	古典 冊	東登 冊	西登 冊	古登 冊	
	カード	東書 枚	西書 枚	古典 枚	編纂 枚	印目 枚	雑目 枚	

◆司書部閲覧者

◆書庫巡察

・西書課 午前9時30分、午後4時 ・古典課 午前9時、午後4時

資料① 司書部職員一覧（1948年）

氏名	職級	職責	所属	異動	備考
姜鏞揆					
姜台遠	助手		古典課（2/26）		8/25 辞職
金甲童	副司書		編纂課	東書課（4/19）	
金甲奉	副司書		東書課		
金壯煥	助手		西書課		
金正奎	司書	課長	西書課		
金貞鉉			収書課（4/27）		
金鍾相	司書	課長	古典課		
金春子					
南相福	助手		収書課	閲覧課（4/27）	
柳寛永	司書	課長	古典課（4/6）		前閲覧課 8/21 辞職
柳從潤	出納手		東書課（4/19）		
文錫讚			閲覧課	古典課（10/7）	
朴奉石	司書	部長	司書部		
朴娟根			東書課	編纂課（2/24）	
朴在秀	助手		東書課（4/19）		7/6 辞表
朴熙永	司書	課長	東書課		3/15 辞職
邊基範	司書	課長	編纂課	東書課	
宋正壽					
梁完錫	出納手		収書課（5/1）		
吳忠煥	副司書		西書課	東書課（4/19）	
李光子			東書課		
李範臣			古典課（9/11）		9/10 古典課勤務開始
李逸穆	副司書		古典課		
任鍾淳			収書課		
張璿性	司書	課長	収書課（4/6）		
鄭啓燮	嘱託		古典課（2/23）		
趙基沢			東書課		
趙泰孝	副司書		東書課		
秦載弘	副司書		東書課	西書課（4/19）	
崔鏞澤	司書	課長	収書課（2/23）	閲覧課（4/6）	1948年課長在職
韓晶根			古典課（4/19）		
許楸	副司書		収書課		
黃爽周	助手		収書課		

※氏名順は韓国語のカナダラ順による。

訳者あとがき

略年表では、朝鮮総督府図書館が計画された1922年から、日本の植民地からの解放も意味する、連合国によるポツダム宣言受諾の1945年を経て、韓国国立図書館となってから1953年の朝鮮戦争休戦までを記した。特に1945年から1952年まではかなり詳細な年表となったが、その後についてはここで簡単に記してみたい。

1957年8月、阿峴洞書庫を一部改造して閲覧室を設け、阿峴洞分館として中高校生用に開館。

1958年7月、『国立図書館報』を再刊、定期刊行物閲覧室、参考図書閲覧室を新設。

1959年2月、本館への中高校生利用を停止、4月に阿峴洞分館の閲覧室を増設、5月から午後10時まで開館。

1963年10月、韓国において図書館法が公布され、それに伴い国立図書館は「国立中央図書館」と改称。

1965年3月、図書館報施行令により納本制度が施行。

1974年12月、本館を中区小公洞から中区会賢洞の子ども会館の建物に移転し開館。

1981年9月、分館を麻浦区阿峴洞から江南区駅三洞に移転。

1988年5月、中区会賢洞から瑞草区盤浦洞の現在地に新築移転し開館。

1990年8月、ISBN（国際標準図書番号）、ISSN（国際標準逐次刊行物番号）を運用開始。

1999年11月、博士論文も収集対象となる。

2004年9月、蔵書500万冊達成。

2006年6月、駅三洞分館を国立子ども青少年図書館として開館。

2009年5月、本館敷地内にデジタル図書館が新設開館。

2012年8月、本館敷地内に国立障がい者図書館が開館。

2013年12月、世宗特別自治市に国立世宗図書館を新設開館。

2015年5月、蔵書1000万冊達成。

2020年6月、国立障がい者図書館を所属機関昇格により分離。

この間、何度も組織改編をおこない、2024年2月には2部2館1センター16課1チームとなっている。

以上は、韓国国立中央図書館ホームページ内の「図書館紹介」のサイトを参考に記したものである。（最終確認日：2026年5月18日）

さて、原書とは偶然の発見から始まった。3年前のある日、韓国の書店サイトで原書を偶然見つけて入手し読んでいくと、仕事柄もあって興味深い内容であり、個人的に翻訳をして楽しんでいった。今から80年近く前の韓国の国立図書館でも、現在の図書館と変わら

執筆者紹介

◇韓国図書館史研究会

ソン・スンソプ

明知大学校文献情報学科および教育大学院司書教育専門教授、韓国図書館史研究会会長。韓国図書館情報学会副会長、(社)「フォーラム 文化と図書館」理事。大統領直属図書館情報政策委員会の各種タスクフォース(TF)分科委員長および諮問委員。韓国記録管理学会、韓国情報管理学会理事。韓国図書館協会の南北交流協力委員会委員長と図書館基準特別委員会、情報格差解消委員会、広報戦略委員会、国際交流協力委員会委員など多数の分科委員会で活動。国立こども青少年図書館諮問委員、ソウル図書館資料選定委員など様々な図書館の運営委員を歴任。司書として勤務していた統一部の北朝鮮資料センター長を退職後、統一部諮問委員、特殊資料審議委員を経て、民主平和統一諮問会議諮問委員と平和問題研究所諮問委員職も務める。

チョ・ハリン

弘益大学校国語教育科、日本 東京大学大学院教育学研究科図書館情報学修士、同大学大学院博士課程修了。韓国図書館協会国際協力委員会委員および国際図書館連盟(IFLA)図書館史分科常任委員を歴任。国立こども青少年図書館情報サービス課長。館内研究グループ「国立中央図書館史研究会」を率いている。

クオン・サンス

韓国古書研究会長、韓国伝統商学会理事、韓国商業教育会理事。ポヨン女子高等学校、抱川(ポチョン)第一高等学校、京畿国際通商高等学校などの教員を務める。高等学校の会計原理などの著書「松都治簿法四介文書の理論と構造に関する研究」「韓国の西洋簿記導入史に関する研究」など。

(略歴は原書刊行時のものである)

◇「司書部日誌」翻訳刊行委員会

田中 亮 (たなか・まこと)【訳者】

1969年山形県山形市出身。中学時代にテレビで見かけたハングルに興味を覚え、韓国語の独学を始める。東北学院大学経済学部卒。東北大学附属図書館、いわき明星大学(現・医療創生大学)図書館勤務を経て、2006年宮城県教育委員会に司書として採用され現在に至る。

飯澤 文夫 (いいざわ・ふみお)

1949年長野県辰野町出身。元明治大学図書館勤務。元帝京大学准教授。共著に「図書館から公共性を考える」(藤江昌嗣編著『場、建物、空間から公共性を考える』学文社、2023)、編集に『地方史文献年鑑1997-2024』(岩田書院/白鳥舎/日外アソシエーツ、1999-2025)、監修に『郷土ゆかりの人々—地方史誌にとりあげられた人物文献目録』(日外アソシエーツ、2016)などがある。

新藤 透（しんどう・とおる）

1978年埼玉県熊谷市出身。2006年筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程修了。博士（学術）。現在、國學院大學文学部教授。専攻は図書館情報学、歴史学（日本近世史）。

主要著作に『図書館の日本史』増補改訂版（勉誠社, 2025）、『日本の図書館事始：日本における西洋図書館の受容』（三和書籍, 2023）、編著に『写真にみる日本図書館史』（日外アソシエーツ, 2025）などがある。

千 錫烈（せん・すずれつ）

1976年茨城県水戸市出身。在日韓国人三世。筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程退学。修士（図書館情報学）。現在、関東学院大学社会学部教授。

近著に「韓国議政府市の「読書の街」政策と公共図書館：英語図書館を中心に」（『図書館評論』（66）, 2025）、共編著に『2050年の図書館を探る』（「韓国の図書館制度～海外の図書館動向から考える日本の図書館の未来～」収録, 日外アソシエーツ, 2025）などがある。

韓国国立図書館 司書部日誌 1948

2026年7月25日 第1刷発行

編 集／韓国図書館史研究会、「司書部日誌」翻訳刊行委員会

訳 者／田中亮

発 行 者／山下浩

発 行 行／日外アソシエーツ株式会社

〒140-0013 東京都品川区南大井6-16-16 鈴中ビル大森アネックス

電話 (03)3763-5241 (代表) FAX(03)3764-0845

URL <https://www.nichigai.co.jp/>

印刷・製本／シナノ印刷株式会社

不許複製・禁無断転載

<落丁・乱丁本はお取り替えます>

ISBN978-4-8169-3113-0

Printed in Japan, 2026